



プロレタリア文学集・32

本英吉、タカクラ・テル集

日本プロレタリア文学集・32

橋本英吉、タカクラ・テル集

定価 二八〇〇円

一九八八年四月三十日 初版©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒150 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三三) 四二二一八四〇二(営業)

(〇三三) 四二二三一九三三三(編集)
振替 東京 三一 三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01609-0 C0393

日本プロレタリア文学集・32

橋本英吉、タカクラ・テル集

目次

橋本英吉

嫁支度	七
棺と赤旗	一四
発端	二六
少年工の希い	四三
眼	五一
金融資本の一断面	五五
ガス!	六五
建築	七九
わかもの	八三

坑夫傷害日記	二〇
樺の芽立	二四
炭　坑	一五〇
タカクラ・テル	
百姓のうた	二二三
解　説	松澤信祐 四二七
発表年月日と掲載文献	四四五

橋本英吉

嫁支度

キクエは、まだいいとは云えなかったが、どうしても寝ていられない性分だ。父が夜勤に出てから間もなく、病床から起き上った。部屋は四畳半、枕元には飯台が待っている。井の底に残っていた沢庵を、弁当箱の隅に一列に並べて蓋をした——五時半の汽笛が鳴ってから幾らも経たない、まだあの剣術使いの人事係が巡視に來ない位だ。六時の交代には間に合うに違いない——考えながら、猿股を履いた。ベタベタに汚れた仕事着に着替えると、ゾッと寒気がして、真二つに斬られたように、上半身が傾きかけた。が、頑張った。タイヤのように強靱な彼女の忍耐力だった。そのまゝ、納屋の戸をしめると、鍵を弁当袋にしまつて外に出た。路面は風に凍っていた。電柱の下で花崗石がふるえていた。彼女は薄皮を剥がれるように慄つとして、「むうッ」と唇を

嚙んで駆け出した。坑夫の溜りには、もう誰もいなかった。坑口では女達が、兎に乳を吞ませていた。胃袋の容量には限りがある。それに女達は、十三時間分の乳を吞ませようとしているのだ。身体検査所の前は狭くなっていた。帽子や脚絆をつけないもの、足の指にヘットを塗らないもの、煙草を隠している者、等を探そうというのだ。だが實際は素人の參觀者を感じさせる仕組だった。で稀に検査を行うと、鉱夫の懷中からは、煙草の代りに、祛痰剤を掴み出す位のものだった。もう一つ、鬚を生したものは入坑させないという規則があつたが、理由は、次のような嚴肅なものであつた。一、何よりも坑夫等には鬚の必要を認めない。二、鬚の主は以前に坑夫以上の人間であつたらう。としたならば坑夫程従順でないであらう。三、監督者との区別がつかない。……

キクエは採掘場についた。そこの高い気温は彼女の血行を乱した。腦貧血だ。彼女は坑木に腰かけて、ボンヤリ穴の奥の父の火を見ていた。父は彼女の來たのにも気付かず、マイト穴を掘っていた。軽快に振るハンマーに連れ、飄々と鑿が響く、右手のハンマーがヒョウと半廻転する、と、右腕の力瘤がリユウと盛上る、チーンと鑿、右腕がクルリ、汗がキラリ、鑿がチーン……

ヤッ！ コラコラ

嫁にやるなら町人さまへ

千両箱を馬に積み

エッサエッサ丘越えて

ゆきなさんせえ町人さまへ

坑夫の誰もが好む唄であったが、彼は稀にしか此の唄を唄わなかった。というのは、彼は自分の二人の娘のうち、姉のカツエを既に町人に縁づけて、坑夫等の羨望を集めたのみならず、更に妹娘キクエをさえも、近々町に肩付けようという考えだ。だから此の唄は、自分の誇りを誇ることになってはならないと、心懸けて唄わないでいたのだ。だが今日は聞くものもなし、それにいい気持だった。キクエはまだ坑木に腰かけていた。穴の中は虚だ。

「父っちゃーん。」

サトツ、キタサツ……………

突！ 突！ と鉱石を砕く鉄の反響ばかり。

「父っちゃーん」

「キクウ？」

「……………」

「もう、お前、よくなったか？ うんうん。」

彼は満悦した——感心に働く娘だ。こいつは俺に樂をさ

せるぞ——

「炭の理が変った。炭の理が。マイト三本で八両出すぞ。

二円八十錢じゃ。さア、やろう。」

彼は娘を商人に嫁つてしまえば後生安楽だと考えていた。尤もこれは彼だけの考えではない。娘を持つ程の坑夫は、皆、商人の表面上の平安さに憧れ、彼等との縁組を一門の榮譽と心得ていた。キクエの父も、この伝統的精神に禍された一人であった。姉は美人だったが、キクエは發育盛りを坑内で働いた為めに、姿態は不整でさえあった。その代り素晴らしい彼女の忍従の美は、何人にも愛されるであろうと父は思った。そこで彼等は嫁支度に没頭しだした。

翌日、寝ているところへ姉のカツエが来た。するといつものように、近所の娘や嬢連が戸口に殺到した。彼女達は妬ましさや、媚や、羨ましさの有りつたけを丸めてカツエに浴せかけた。そして正午の汽笛を合図に、鳥が餌から散るように帰って行った。

姉の要件は金のことだった。炭坑が最近、日用品の廉売を始めたので、坑夫相手の町の店が一般に売れなくなった。それに伴って掛も集らなくなるし、商品を入れ替える外はない。で金を貸してくれというのだ。

「さア……困ったなア。」

「替えれば、坑夫も来るじゃろ、そうすりゃ掛も集るからなア。」

「そりゃまア、そうじゃが……」

「いいじゃないか父っちゃん。わしはまだ嫁にゃ行かんぞ。」

キクエは、そう云って平然としていた。父は、まだ商売に対する信頼を持っていたのか、幾らかの金をカツエに渡して帰した。キクエは床の中で姉の美しさが微笑ほえまされた——きつと樂をするからだ。自分だつて坑内で働かなくななり、伸び伸びと陽ひかりの中で暮らせるようになれば、姉ほどになるかも知れない——自分の美醜を意識しない程、彼女は幼稚だった。

「父っちゃん、貯金は三百五十円じゃったなア。」

「ええと。うん、そうそう、待てよ。」

父は起き上つて畳をあげた。

「もう此処に隠さん方がええ、誰が氣がつくかも知れんならなア。」

通帳の隠し場も尽きた。

「納屋の中は、火事の時、焼けるかも知れんよ。」

「何処にしよう。」

「どう見せて……ああ、三百六十円じゃ、父っちゃん！」

「そうじゃったか。」

彼等は布団の中で飽かず頁を繰った。

「ははは……やっぱり三百五十円じゃ、父っちゃんはちつとも分りやせんなア。」

「そうじゃろ。多すぎると思つた……隠し場をもう変えた方がいいわい。」

「隣りのお婆さんに預けたら……」

「ばかッ、あの婆ばばあ！」

「じゃ幸ちゃんのように、大きな墓口がまぐちに入れて肩に掛けて行こうか？」

「笑われるぞ。けちんぽというて……そうだ！板に挟んで肩に掛けたら、金比羅様のお札のように見えるぞ。そうじゃそうじゃ。」

ところで、少々困つたのは湯に入っている間、通帳はどう始末して置くかということだ。無論、今まで通りには行かない。どうしても親娘交代だ。然し父は煙草を早く喫みたがるし、娘は食事の支度があるし、どっちが先でも具合が悪い……ところが両方好いという方法が長案の末、考え出された。それは風呂番に煙草を預けて置いて、坑内から上ると一服やりながら、娘が湯から上るのを待つて通帳を

渡す。娘は先に帰って飯を焚く。で父は今までよりゆっくり炭塵^{あか}を洗い落す、従って布団も汚れないという訳……新方法は親娘を盗難の懸念から解放した。のみならず、彼は日々、蒲鉾板に挟んだ通帳で横腹を撫でられながら、福運に尾行されているような幸福感に浸ることが出来た……

濡れたケージのロープが、夕方から凍っていた。空に刺さっている百二十尺の煙突のてっぺんに、無数の鳩が蠅のようにたかっていた。それは、暖まる為であったが、多くの鉦夫は縁起を云って坑口から引返した。然しキクエ親娘は、入坑者の少い時こそ仕事が捗るので、気持は悪かったが下った。と、坑内の人道の傍で、不吉なものを見た。怪我人だ！ 父親が十四五の男の子を背負っている。子供の足は折れている。天井を被ったのであろう。脚絆を突き破って白い脛骨の折れ口が二本の葱^{ねぎ}のように見えた。折れた先が歩く度に提灯のように揺れるのを、母親が下から抱えて人道を上って来た。

「ああ、やられたな！」

「折れてしもうた。」

「担架は、担架は！」

「担架も何もありません。」

下りて来た坑夫達が、通風用の帆布と小さな丸太で担架を拵えてやった。傷口に女の白木綿の胴巻を捲きつけた。子供は出血に衰えて、泣かなかった。此処でも多くの坑夫が、引き返した。キクエ親娘は打ち挫かれて立っていた。だが一日休めば、それだけ長く自分達を坑夫にして置かねばならぬと考え直して、少しばかりの坑夫と採掘場の方へ下りて行った。

炭は一層、軟^{やわらか}になっていた。打込む鶴嘴^{つるべ}の尖^{さき}から黒幕のような煙となって炭層が崩れて来た。彼は不吉な思ひ出を黙殺した。鶴嘴は彼に元氣をつけた。板に挟んだ通帳は、鞆^{たもと}のように彼の横腹を叩いた。頓^{とん}！ 頓^{とん}！ と唄が転げる。

棹取^{さとり}さん、函おくれ

うちの娘は容貌^{きようぼう}よし

係長さんさえ

見染めた程じゃ……

「おい！ おい！ こりやどうじゃ。」

「へい、小頭さん、御苦労さま。」

「どうじゃ、この炭塵は、水を撒け、水を。」

「はいッ、今汲みに行行って居ります。」

「斫^きり賃^{しん}が下ったぞ。軟^{やわらか}になったからなア。」

「もう下ったんですか。そりゃ早すぎる……一体なんぼに

なつたんですか？」

「研り賃か……三十銭。」

「三十銭？ 五銭も一度に……そりゃあんまり……」

「安い。係長に話してくれ。係長が下げたんじゃから。」

「三十銭はあんまり……」

「仕方がない。まあやるさ。ははは……」

小頭は木刀の杖を振りながら行つてしまつた——馬鹿野郎！ 三十銭なら十函出しても三円だ。一生懸命になつても二人で八函の一円二十銭宛だ。係長に言えつて？ 係長なんか見に来たことはねエじゃねエか。狸め！ 今に見ろ、こつちから暇を出してやるから、どうせ長くはねエ勝手にしやがれ！

彼は竹の水筒から馬のように鼻をならしながら水を呑んだ。キクエは水を提げて、梁の折れた枠の下から出て来た。と、其の顔は、能の面のように青白かつた。彼は黙つて地べたに座つていた。そしてキクエが撒水を終つてしまうと、急に立ち上つて、

「下つたぞ！」

と云つて、さつさと鶴嘴の尖端を調べはじめた。やがて又唄い出した。

小頭、小頭というて

小頭づらするな

俺もうちに帰リや

七人の児頭さんよ

……………

正月の仕事始めには、キクエは床に就いていた。それが一月余りも続いた。ながしは終日凍っていた。革のように汚れた布団は炬燵に入れると、湿氣が出て来た。爪は汚れていた。

或る朝、漸く遠くの河の面が白んで来る頃だつた。納屋は醒めかけて坑夫の登音が聞えはじめた。納屋の前を、急に鋭い言葉を投げ合つて人々が走つた。近くの戸が激しく開いた。女の泣声が高まつた。キクエは外に出た。同じ棟の納屋の前に、焚火を囲んで坑夫が蹲んでいた。暫くすると、役人がバケツを下げて来た。バケツの中には、飯粒のような肉片と、一切の耳たぶが入っていた。それが死人の全部だつた。カクという娘が堅坑に飛び込んで自殺したのだつた。何しろ堅坑の深さは千二百尺だ。彼女の身体は散弾になつて、地下水に押し流されてしまつたらう。ケージの屋根から拾ひ集めたのを持つて来た。だから肉片には血も滲んではいなかった。

「カクちゃん死んだ！」

と聞いたときに、キクエは少しの疑いをも起さなかった。というのは、正月の三日の事だったが、キクエはカクや他の娘達と権現に参詣するために山を下りた。その日は風が強かったが、長い山丘の裾には、白壁の土蔵があったり、藁束から陽炎が上っていたり、ひよっとすると、百姓家の軒から乾根の匂さえて来た。彼女達は仔犬のように稚稚と五色に彩られた風船玉のように華々しく、山裾を流れて行った。何処からか、何時とはなしに連立った百姓のお神さん達が、打明話をするので益々有頂天になっていた。が、帰り途は、しゃべり疲れ、笑いつかれて二人宛話しながら歩いて来た。すると若者の一団が、列に割り込んで来たので、パッと逃げ出した。暫く走ってから、カクちゃんの居ないのに気がついた——土橋の横で咯血したのだ——彼女は其の時「もう家に帰らない」

と云ってすねていた——して見れば、自殺は当然だ、とキクエには思われた。が、然し、その考えは、次第に自分の方に迫って来るように思われ出した。彼女の畢生の希望さえも半ば、壊滅したような予感に打たれた。

少し恢復した彼女は、仕事の楽な選炭婦になった。が選

炭場の騒音は頭を刺激し、鉄の大篩から上る炭塵は肺を侵した。女達は、手真似の会話に慣れていた。そこでは機関が凡ての音響を抹殺したからだ。監督は唸鳴る代りに、四角形の鉄板を叩いた。

キクエは、再度床に就いた。今度は動けなかった。毎日、寒かった。風が街角のように部屋を抜けた。彼女は白紙のように冷たくなって横わっていた。思い出しては枕元の粥をすくって喰べた。遂に血を吐いた。一枚一枚と積み上げた財は、凡て彼女の肺細胞の累々たる屍に過ぎなかった。「カクちゃんは飯粒のように碎けた。自分は白骨になるだろう。」

此時から、彼女は異常な忍耐力を失なった。希望は壊滅した。日毎に憔悴して行った。足元の行火にピタリと両足をつけて、黙っていた。

姉のカツエは、それを父のせいにした。

「嫁支度もいいが死んだら何にもならん。」

「うん……」

「父ちゃん、うちの人は、他処に行つて日傭取をするようになったよ……」

「そうか……」

父は指をボキボキならした。病人は床の中で硝子のよう

に透明になっていた。

「姉ちゃん……」

「なに？」

「わしの髪が臭いだろう？」

「いいえ……」

「髪を洗いたい。」

キクエは、突然、活気づいた処女のようにそんなことを云った。

「姉ちゃん……」

「ええ？」

「カクちゃんは死んだ時に、耳だけしか残っていなかったよ。」

「……………」

「もう、あきらめた。炭坑のおかげに死ぬものはわしだけじゃない……」

それから彼女は、坑内の仕事場の模様を父にたずねたりした。

度支 嫁

朝と夕方に、交代する坑夫が納屋の前を通った。キクエには、坑夫の足だけしか見えなかった。足を見飽きると、足の主の顔を見たがった。寢床の向を替えると、忽ち、足

の主の顔を知り尽した。もう寝ていて見るものは何も無くなった。

「姉ちゃん、髪が臭い……」

「いいえ、ちっとも臭くないよ……」

「臭いよ。」

彼女は汚れた布団の中で益々硝子のように透明になつて行つた。

棺と赤旗

半島の鼻から一マイル、海の中に炭坑が経営されていた。島は弧状にそりかえった半島に、呑み込まれる食物のように見えた。島の炭坑生活は舟の生活同様に、一皮めくれば海の底である。だが事業は、迫って来る危険率と、同一速度で繁栄していた。地上に搬出される石炭の量が増加すればする程、地中の空虚は拡大するのだから、鉱夫はまるで半日は爆弾を調合し、あと半日は其の爆弾の上で眠る様な仕事をしていた。やがて、ポカリと一発見舞われた軍艦のように、坑夫は島もろとも海中に埋没しないとも限らないのだった。

半島の町は、朝の颯爽たる島の汽笛で、戸を開け始める。そして昨日から続いた煤煙を見て、炭坑が健康な経営状態にあることを知る。煙突は島の浮動を防ぐために打ち込ん

だ釘のようだ。櫓は四本の鉄骨が、百二十尺の空の一点で組合つた四角錐だ。地上から炭層へ引く六百尺の垂直線。七百二十尺のロープで貫通された垂直の坑道は、資本文明が産出した最も惨忍でグロテスクな街路であった。朝と晩、六時の交代時間には、ケージは染物機械のように、青い一群の鉱夫を坑内に送り、黒く染つた鉱夫を積んで上って来る。ガス発電所がある。ガス爆発の連続的な音響が、波の音を消していた。彎曲した半島に歯のように列んだ町々に反映する島の風景はそれだけではなかった。深夜にも動らっていた島は、全身に素晴らしい星の衣裳を装っていた。静まった夜の潮を這うようにイルミネーションの倒映が輝いた。

坑夫岩吉は、めずらしい短気な若者であった。仲間は彼を「マイト岩」と渾名した。それはもちろん煙硝に似た彼の爆発力に冠せた綽名であるのみならず、同時に、彼の優れた腕力をも表現していた。が、今一つ特殊な理由は、鑿でマイト穴を掘ることが非常に巧みであったからだ。先ず見当がよかった。彼は仕事の上では優れた腕を持っていたにも拘らず、少しも待遇はよくなつていなかった。彼と同時

時に島に渡つて来た松之助が、持前の忍耐力で、今は小頭